

## スタッフエッセイ 13 NO181(2007.04.26) ~ 195(2007. 07.08)

181	「期待に添えているのだろうか」	杉野 建史	2007.04.26
182	パーハ	木村 良太	2007.05.01
183	高校の特待制度と奨学制度	亀貝 一義	2007.05.04
184	風邪	芳賀 慈	2007.05.09
185	「死」から「生きる」を考える	椎名結実	2007.05.17
186	シフクノトキ	木村良太	2007.05.19
187	ぶっちゃんのおたんじょうび	田房絢子	2007.05.21
188	華麗なる30代	新藤 理	2007.05.25
189	凝り性な私	杉野建史	2007.05.27
190	「二十四の瞳」から	亀貝一義	2007.06.04
191	勾玉づくり	芳賀 慈	2007.06.05
192	告白	木村良太	2007.06.08
193	連想ゲーム	椎名結実	2007.06.26
194	部屋割り	芳賀 慈	2007.07.06
195	33キ口を歩く	亀貝一義	2007.07.09

### 181 「期待に添えているのだろうか」 杉野建史 2007.04.26

この間、重苦しい夢を見た。数年前になくなった私の友人のお母さんが夢に出てきた。小中学の時期にとても私を可愛がってくれ、高校生になりほとんど顔を合わさなくなってからも私の母を通じ気にかけてくれた人だった。小学生時分の私は、その当時の大人から見ても「昔の子供らしい子供」だった。(そういうことを母がよく言われたと教えてくれた)遠慮しないというか、馬鹿正直というか、いつでものびのびしていたというか、何でそういわれたのかは解らないままである。もう少し私の話をすると、小学校の通知表には「最後まで人の話をしっかり聞きましょう。落ち着いて行動しましょう。」と6年間書かれ続けたし、親からも「落ち着きがない」と言われ続けた。そんな私であったが、良い部分を見てくれる親以外の大人が身近にいたことが、私の成長に大きな影響を与えたことは間違いない。

友人のお母さんは病気が原因で若くしてお亡くなりになられた。中学生の時、「正義を貫ける大人になってね。人を思いやることのできる大人になってね。」と私の目をまっすぐに見て言った。夢の中で私は人目をはばかりことなく大泣きしていた。涙が止まらなくて、声を抑えることもできず泣いた。御葬儀の場面が夢の中で再現されていた。私は少し大人になった私の姿を見て欲しかったのだろうと思う。「ちょっとは大人になりましたよ。少し成長しましたよ。」と。

朝、目が覚めてこの夢は何を意味するのだろうと不思議だった。そして、私は子供だった私を見守ってくれた大人達の期待に少しでも応えることができているのだろうかと考えた。人の期待に応えるために生きているのではない。でも、時分が生きていく中で「人の想い」を受け止めて、期待に添え

る自分でありたいとも思う。

私が歩いてきた道、今歩いている道。  
私は期待に応えられているのだろうか。

## 182 バーH 木村良太 2007.05.01

昨年の秋頃から時々顔を出しているバーがある。名前を出しても悪くはないと思うのだが、マスターから許可をもらっていないので、とりあえず、「バーH」としておこう。ここは私にとって、とても居心地のいい場所の一つである。まだ数回しか訪れていないが、けっこう気に入っているの、長い付き合いにしたいと思っている。店がつぶれなければ大丈夫だろう。

初めて行った時は、待ち合わせの時間調整が目的だった。こじんまりとしたその店に一人で入るとい、まさにその瞬間の緊張は今でもはっきりと覚えている。ドアの前で一度深呼吸をし、意を決して中に入った。先客は女性二人のみ。私は入り口近くのカウンター席に座り、マスターから手渡されたメニュー表に目を落とす。そして呼吸を整える。ウォッカ・ベースのカクテルを注文し、マスターの方に目をやりつつ、先客の会話に耳を傾けた。

以前から、一人で飲みに行ける店がほしいと思っていたが、具体的に探すという行為には至らなかった。ある日、ふと立ち寄ったコンビニで、オヤジ向けの某雑誌を「まだ俺には早いなあ」と思いながらも購入し、読んでみた。この雑誌で紹介されていたバーの一つで、一番気になったのがこの店だった。グラスが運ばれてくるなり、ここに来るそんな経緯をマスターに話し始めた。いつの間にか先客は話をやめ、私の話を聞いていた。マスターはその某雑誌をどこからか取り出し、その女性客二人に見せた。間もなく、マスターを介しての会話が始まった。

私が二杯目を頼む頃には、二人のうちの一人と直接話をするようになっていた。ふと腕時計に目をやり、待ち合わせの時間が近づいていることを知る。少々焦りながら話を続けていると、なぜかカラオケで一曲歌う羽目になった。マイクを持たされ、流れてきたのは、「抱きしめたい」。ミスター・チルドレンの初期の人気曲だ。「何で初めて会った人にこんな曲を？」と思いつつ、自分の世界に入って歌った。いい曲だと思うが、残念ながら私の歌唱力では、曲の良さを打ち消してしまっていたと思う。実に申し訳ない。

歌い終わると、「すみません、人と会う予定があるので…」と言い残し、会計を素早く済ませて店を出た。一時間程度でしかなかったのだが、十分にその場を楽しむことができた。そして、「また来たい」と思った。普段は接することのない人たちと同じ空間で飲み、歌い、会話を楽しむ。なかなか得難い場ではないか。なかなか興味深い場ではないか。もっと楽しめそうな場ではないか。私はこのバーに、ちょっとオトナな空間としての自分の居場所を作っていこうと心に決めた。

## 183 高校の特待制度と奨学制度 亀貝一義 07.05.04

8月の高校甲子園野球大会を主催している日本高野連が、これまではっきり言ってこなかった「スポーツ特待の制度は認めない」と強調し出した。これは、日本学生憲章に違反するからである。誰もが知っているように、全国の、特に私立学校では「特待制度」を採用している。これにはおおざっぱにいうと「成績特待」と「部活特待」がある。成績のいい生徒やある種のスポーツ(だいたいテレビその他で報道されるハデなもの・野球など)に秀でた生徒に対して、入学金や授業料をタダにしたり、安くしたり、あるいは「奨学金」というお小遣いをあげたりするのが「特待制度」である。

日本高野連は、これは先の憲章に反するのでこういう方法でいい成績をあげることは公平の原則に反するから認めないといっている。今の所300校以上もの高校が「違反」していることが明らかになって、大騒ぎになっている。歴代の強豪高校が問題になっているので、今年の甲子園はどうなるのだろう、と心配でもあるし、興味もある。

特待制度の理由は、少しでも成績やスポーツで秀でた人を受け入れたら自分の高校の宣伝になるか

らである。それにかかるオカネは普通の生徒が払う月謝や公的な援助金からまかなわれる。普通の生徒たちは「オレの負担したカネで特待生を入れるので自分も人のために役立っているのか」と思うか、「ひどく不公平、それはないよ」と思うかは人それぞれだろう。

今ことさら問題になり出したことについて、一部の人は「一芸に秀でることを評価することがなぜいけないか」とか「頑張っていることへの特待がダメということなら子どもは頑張らなくなる」などの反対論がある。私はこういう反対論はスジが違うと思うがどうだろう。

この特待制度に似た仕組みに「奨学生制度」がある。経済的に進学・進級が困難な場合に国その他が「奨学金」を準備してその生徒の進学を援助する仕組みで、私なども大学進学はこのおかげでできた。他にそういう人がたくさんいた。

今日本では学力の高い生徒の多い学校に公的援助金を増やそうという動きがある。つまり教育と学校全体に「特待制度」をつくらうというわけだ。

世界でもっともいい成績のフィンランドでは成績のよくない生徒の多い学校に公的援助金を増やしてしっかり勉強できるようにサポートするのだそうである。つまり、「奨学金制度」の応用である。どちらが教育と子どものためになるのか、ははっきりしているではないか。

#### 184 風邪 芳賀 慈 2007.05.09

風邪をひいている人がとても多い。昨年は開校以来初めてインフルエンザによる臨時休校なども行った。今のはやり具合もその時に近い。ちょっとくらいなら休まなくても、という人が大半なので、お互いにせきとくしゃみのキャッチボールのようなことになる。この中で難なくひかずに過ごすのは至難の業だ。

もし風邪の菌が目に見える大きさだったら、大変なことになるだろうと想像する。地下鉄もバスも、気持ち悪くて乗れないだろう。「おやじ」の「へーくしょい！」というくしゃみは、暴動のもとになるかもしれない。そうなると菌の方も繁殖しづらいから、やっぱり今の大きさが良いということになる。

ところで私は風邪をひいていない。熱っぽいようなだるさもものどの痛みもない。だから明日はマスクをしてこようと思う。効果はふたつ。風邪菌を吸い込まないこと、みんなが私を避けること、である。

#### 185 「死」から「生きる」を考える 椎名結実 2007.05.17

年を取るということのうち、これまで全く想像もしていなかったのが、人の死に接する機会が増えるということだ。昨年からこっち、やむを得ない経緯を経て、身近な人の訃報を耳にすることが増えてきた。きっと、これからも増え続け、決してなくなることはないのだろう。それを考えるだけで、もう、年を取ることはずらいたくなくなってくる。

けれど、そんな時に必ず思い出す言葉が2つある。ひとつは自分の父親を介護の末に看取った叔父から、「親父はああやって、人間ってのは、こうやって死ぬもんだって教えてくれたんだ」という言葉。それからもうひとつは「生まれた瞬間から人間は死に続けている。その人がどう生きたかっていうのは、死んだ時初めて決まるから、死ぬことは生きることなんだ」という知人の言葉。

私たちの細胞は毎日毎日死んでゆき、同時に次々と新しく生まれてゆく。いつだって「自分」はその過程のただ一瞬、このようにあることが奇跡のような存在なのかもしれない。そんなことを考えながら、明日は叔母の葬儀のために東京に行く。今の自分にできることを精一杯やるために。

#### 186 シフクノトキ 木村良太 2007.05.19

昨年の秋、前にいた会社のK先輩と2、3年ぶりに会った。その少し前にK先輩の退社の知らせをかつての同僚のKから聞いていた。相手が忙しいことは分かっていたが、少し無理を言って会ってもらった。この機会を逃すと、しばらく会えないような気がしたからである。チャンスが再び来るとい

う保証はどこにもないのだ。

先輩との再会は、居酒屋でのわずか2時間程度。一番聞きたかった、会社を辞めた理由と今後の仕事のことについては、こちらからも切り出すことなく話は終わった。しかし、少なくとも私にとっては中身の濃い時間だった。今まで2人で話すことといえば、会社と仕事のことばかり。スーツを着ていなくても、話はスーツ着であった。少々酒を飲みながら普段着の話ができたのは、これが初めてだった。

最近の教育について語り合い、そこから哲学や宗教、歴史と古典などと話がつながっていった。我々が歴史を学ぶ意義、古典が今に受け継がれる理由、好きな作家など、自身の考えや嗜好を熱っぽく語る先輩に刺激を受け、私も大いに語ったように思う。話をしている間、話を聞いている間はずっと楽しかった。大げさなようだが、シアワセを感じていた。

先輩はかつて、「おまえと仕事がしたかった」と言ってくれた。この言葉はこれまで私を支える力の一つになっていた。そう評価してもらえたことがうれしかった。この日は、「おまえとKと3人で、仕事がしたかった」と言った。私も一緒に仕事がしたかった。でも、むしろこう言いたい。「いつか3人で仕事をしましょう！」と。“3K”が集まれば怖いものなんてないでしょうに。

私の今は、先の見えない我慢の時だと思っている。それでも、いつか私なりの雄飛の時が来ると信じられれば、耐えられる。その時が来ることを楽しみに待っていたい。少しずつ、ゆっくりと力を蓄えながら。いつか、本当のシフクノトキを迎えられるように。そして、もし3人でその時を迎えられたら、なんと素晴らしいことだろう。

#### 187 ぶっちゃんのおたんじょうび 田房 絢子 2007.05.21

先日、29歳の誕生日を迎えた。ひっそりと終わらせるのは寂しかったので、その前の週から宣伝し、当日も「今日は素晴らしい日」として、クラスの生徒に紹介した。プレゼントを用意してくれていた生徒がいたり、「今日は誕生日だね。おめでとう」と言ってくれた生徒もいた。そうして楽しい一日を終えようとしていた。そしたら・・・！

放課後の教室は人で溢れかえり、私を迎える生徒たちのアーチがそこにあった。うちのクラスの生徒のみならず、1年生・3年生の顔もあった。まさか、ここまで・・・?!と感激しつつ、そのアーチを曲がっていくと、“ぶっちゃん おたんじょうびおめでとう”と書かれたケーキと花束が用意されていた。今までの人生であんなに盛大に祝ってもらった事はなかった。黒板とホワイトボードには、三十路まであと一步といったような心温まるものを含め、みんなからのメッセージが所狭しと書かれていた(もちろん写真に納めた)。

私は最高の幸せ者に違いない、としみじみ思いながら至福の一時、そして一日を過ごす事ができた。「田房絢子ちゃん 29才おめでとう 生徒達より」と書かれたカードは、花が枯れても決して色褪せることはないだろう。

「ちょっとおねだりしすぎたかな、ごめんなさい。」と反省もしつつ(ほんとに何かしてくれるとは思わなかった!笑) 笑顔でおめでとうと言ってくれる生徒たちに感謝感謝の気持ちでいっぱいになった。そして、おめでとうの後に、「ぶっちゃん、これからもよろしくね」と言ってくれた子ども達の笑顔を私は一生忘れないだろう。

みんなといると、誕生日の度に若返っていく気になります(笑)。みんな、本当にありがとね。

#### 188 華麗なる30代 新藤 理 2007.05.25

田房さんと私は誕生日が近い。誕生日の話題を続けて一つ。小学2年生ごろだったろうか。家族でインド料理店に出かけたことがあった。カレーだけで何十種類ものメニューがそろい、辛さも好みの6段階で調節できるという。家に入っていたチラシにつられて、私がお願いしたのだ。

辛さはいきなり第4段階の「HOT」を選んだ。ファミリーレストランのカレーとは味も辛さも違う。

店内に漂う強烈なスパイスの香りにもやられたのが、食べ終わるころには頭が痛くなっていた。

だが、少年オサム君は懲りない。

具合を悪くするんだからダメという親を必死で口説き、またも件のお店に連れて行ってもらった。今度の辛さは「ベリーベリー HOT」。もちろん「第6段階」である。親はあきれて、もう好きにしないでというふうだ。強烈なスパイスの香りと辛さで頭に血がのぼったオサム君は、何口か食べた後で店員さんにこう言った。

「すみません、もっと辛くしてもらえますか？」

インド人の店員さんは、「オオー、スゴイネ、大丈夫？」と言いながらカレーを厨房に持っていてくれた。

...何というか、ちょっと変わった子どもだったのだろう。運ばれてきた「ベリーベリー HOT」をさらに辛くしたカレーは、もはや小学生に太刀打ちできるものではなかった。涙目で店員さんに「すみません、やっぱり辛くなくしてください...」

数分後、ヨーグルトでマイルドに調味し直されたカレーがやって来た。

その後、どんなにお願いしてもそのインド料理店に連れて行ってもらえることがなかったのは言うまでもない。

カレー好きは大人になっても続き、「札幌スープカレー」のブームに合わせていよいよ拍車がかかっていった。

だが、新藤も5月からは30代。健康に気を遣い、カレーはめったなことでは口にしない決意を固めたのだ。誕生日の21日を境に、野菜やお豆腐中心の食生活を始めた。

その日の放課後。ブル部の生徒が「新藤さん、楽器が壊れた！」と血相を変えてやって来た。あわてて5階に走ると、部屋が真っ暗...。クラッカーが鳴り、部員たちの「ハッピーバースデー」の歌声が響いた。

「新藤さん、これ全部食べて、明日からはしっかりダイエットしてね！」

手渡されたのは、ローソクつきの手作りケーキと、大皿に盛られたカレーだった。

## 189 凝り性な私 杉野建史 2007.05.27

自身を分析してみると、他の人と比べて「こだわり」が強いように思う。

全ての物に対して凝るわけではないのだが、気に入った物に対しては人一倍こだわってしまう。一番初めにこだわったものは何かと思い出してみると...ジャージだった。某メーカーの紺色のジャージにあこがれた。紺地に赤と白のライン、トリコロールカラーのそれは当時もの凄くハイカラに感じ、誕生日のプレゼントとお年玉を合わせて親に無理を言って買ってもらった。同じ学年(当時小学校6年生)にお揃いのジャージが6つ...。それから20数年経って、今現在凝っているのは自転車と時計。

前者は環境破壊を少しでも防ぐため、環境保護を個人レベルでできることから始めるため、それまで所有していた愛車を手放し通勤に使っている。ところが、自転車通勤を初めて1年と4ヵ月経った時、愛車は何も言わず私の前から姿を消した。忘れもしない、JRのK駅の前で私を待っているはずの彼の姿がなかった。近辺を1時間以上かけて探したのだが姿を見つけることはできなかった。警察に捜索願を出したが情報はなしのつづて。泣く泣く次の相棒を手に入れた。これが今のライムグリーン色の相棒である。この相棒を手に入れる時は数冊の本を買い込んで自転車の様々なパーツについて研究した。自転車メーカーに始まりタイヤまで。それまでほとんど興味がなかった自転車に対して私の「こだわり」のスイッチが入ってしまった。大学で機械を専攻していたおかげで(?) やけにメカ(機械)の部分が気になるし材質なども気になる。

使う環境は通勤と少々のトレーニングだけなのに、材質の強度やパーツの重量、スペックなどにハイパフォーマンスを求めてしまう。このパーツだったらとか、この材質だったらとか、いろいろ想像し“妄想タイム”を費やす。納得して購入したが、いろいろな情報を調べるとついつい目移りしてしまう。しかし、これから長い時間つきあうことになる相棒を大切に、安全運転で通勤しようと思う。

自転車事故が新聞の一面を飾っている。死亡事故が起きていて相手に対する賠償についても大きな問題である。先日、保険に加入した。

後者の時計についての「こだわり」は後日、またじっくりと…。

#### 190 「二十四の瞳」から 亀貝一義 2007.06.04

高校1年生の「現代社会」の担当は私ではなく担任の椎名さんだが、戦前の日本を知るために生徒たちに「二十四の瞳」を観てもらった。

この映画は、高峰秀子主演で昭和20年代の終わりにつくられ大きな反響を呼んだ。しかし今の高校生にはわかりにくいところがあるので、若干のコメントが必要、「昔のこと」の解説が求められたので1時間私は体験をもとに生徒たちに話をした。

少なくない若者たちが言うのは「どうして戦争に国民みんなが参加したのか。どうして反対しなかったのか。戦争など行かなければよかったのではないか」といった疑問である。

4月末の法事するとき、80歳を超えた叔父が「予科練」の体験を語ってくれた。今の高校生年代の若者たちがどんどん予科練に志願した（海軍の飛行機乗員養成科でここでの厳しい訓練を経て正式航空兵になる）。もう志願しないわけにはいかない、という状況だった。先輩も先生も誰もが「国のため」を叫ぶ中で「よしオレも」という気持ちになるのは当然だったらしい。茨城の霞ヶ浦で訓練に明け暮れしたが、満足な飛行機がなく、操縦ごっこという程度だったらしい。鹿児島に送られてまもなく終戦になったので今日にまで生きられたと感慨深げに語っていた。

要するに一般の人で戦争反対をいうことができる状況ではない。「国民は為政者にダマされた」という言い過ぎだろうか。ある生徒が「国民はバカだったのだ」という。まさに国民は賢く、また勇気が必要なのである。ノーといえる勇気を。

大日本帝国憲法は「日本の主人は天皇で臣民である国民は天皇に絶対的に従う」こと、教育勅語は「臣民」の道徳が忠孝であることを求めたこと、そして「お国のために戦って死んだなら靖国に祀られ『護国の神』となる」こと。この基本の流れが昔の仕組みであったのだと説明した。

あの映画は最後に二十四の瞳が十の瞳になるところで終わっている。戦争で教え子たちが半分以上犠牲になったのである。映画から始まった現社の授業は、私にとっても実に感慨深い1時間であった。

#### 191 勾玉づくり 芳賀 慈 2007.06.05

5月最後の日、埋蔵文化財センターへ勾玉づくりに行った。陽射しが強く、JR大麻駅から歩くと現地に着くころには汗ばむほどだった。

展示コーナーは余り広くなく、トドの大腿骨の隣に黒曜石の石器があるなど、ちょっと不思議な展示方法だった。火起こし体験のコーナーやパズルもあり、生徒たちの興味を引いていた。

昼食後は勾玉づくり体験。すでに2×4×1cm程度に荒く切りだしてある滑石を、紙ヤスリで削っていくというもの。水で濡らしたヤスリを使うので、手も服もみるみる白くなる。係の人の「坊主頭をなげるようにヤスリをかける」という表現に、それぞれが頭に思い浮かべたのは一体誰だっただろう...? 1時間半ほどかけて、みんなの趣深い勾玉が完成となった。

三種の神器の一つという勾玉。胎児のようにしか見えないこの小さなものに、古代の人が寄せた思いは何だったのだろうか。もちろん、今回のようにヤスリでお手軽につくったわけでもないだろうし。

帰り際、ある女の子が「ねえねえ、これ（石器）って何千年も前のものなんですよ。すごい出会いな気がする」と言っていた。センターの人にも敬語を使って質問していて、好奇心と興味を感じられた。ホンモノを見る、体験することの重要性を改めて感じた一日だった。

#### 192 告白 木村良太 2007.06.08

体育の時間にお邪魔するようになってから、かれこれ3年近くになる。これまで主に、学生の頃からやっていたバドミントンというスポーツを通じて生徒たちと接してきた。上手そうなふりをして、

時には偉そうに「指導」などもしてきたのだが、ここで告白してしまおう。実は私、バドミントンが下手っぴで、弱っちいのだ。

私は、長いこと劣等感を抱えながらバドミントンをやってきた。競技として始めたのは中学の部活の時。私の知る限り、当時の指導者の教え子たちの中で、私たちの代が一番弱かった。しかも、そのメンバーの中で私が一番弱かった。部活はかなりシンドかったが、「やめたい」の一言を切り出す勇気がなく、最後まで続けてしまった。逃げ出すことさえできなかったのだ。体の成長と対応するかのようにして大きくなったコンプレックスは、消えるどころか、小さくなることさえ、しばらくの間はなかった。せつかくここまでやってきたのだから、という思いでその後も続けたが、大学2年の春を最後に、競技としてのバドミントンを終えた。何の未練もなかった。ただ、落ちこぼれの自己像が残った。

しかし、3年前の秋に転機が訪れた。たまたま参加してみた社会人のバドミントンサークルの練習で、それまで感じたことのないような「楽しさ」を感じたのである。パートナーのミスを責めない。空振りは明るく笑い飛ばす。嘲笑はしない。いいプレーには拍手。ピリピリした空気はなく、こんな和気藹々といった雰囲気の中でバドミントンをするのは初めての経験だった。このサークルがとても気に入って、今も週に一度ほどは練習に参加している。中にはかなり上手な人もいて、私にとってのいい目標となっている。

気付けば、いつの間にか落ちこぼれの自己像は鮮明さを失い、私の心を時にひどく圧迫していたコンプレックスはその存在感を失っていた。消えてなくなりはいらないが、そんな自分史上の遺物に捕らわれているよりも、今を楽しむ方が大事である。そう感じさせてくれるここもまた、私にとってはかけがえのない居場所の一つである。改めて告白しよう。実は私、バドミントンが下手っぴで、弱っちいものだけでも、けっこう楽しんでますと。

### 193 連想ゲーム 椎名結実 2007.06.26

5月のある日から、担任の思いつきで、一年生は毎朝出席を取る時に連想ゲームをすることにした。「くん」「はい、春」「さん」「はい、えーと、桜」...と言った感じで進んでいく。目的は朝から声を出すことと、できはじめのクラスで互いを少しでも知れるようにだった。初めはつかえつつかえで、授業開始時間ぎりぎりになることも多かったが、このところ誰の番でもスムーズに進む。最後に回ってくる担任が一番時間をかけて考える日もしばしばあり、面白がって聞いているだけだといきなり焦ることになる。

先日は、何かの拍子に「演劇部」、「椎名先生」と来て、「変人」、「犯罪者」と続いた。ちょ、ちょっと待って...!

また、なんとなくやる気のなさそうな朝は、「色」「赤い」から「トマト」ときて「赤い」「色」...と逆行コースに何人も続く。一生懸命考えた子からは「えー」と突っ込みも入り、朝からにぎやかな笑いがこぼれる。

連想がシリーズものになることもある。今朝は「りす」から「森」ときて、「林」。期待を裏切らず、次の子が「木」と言ったところで、私の番に。漢字...漢字だよな、と頭の中でもごもご呟いて、やっと出てきたのは「漢字検定」。ああ、言葉遊びのセンスがほしい...

仕方がないので明日は「漢検」から連想スタート。どんな展開がかかるか、期待を裏切らないメンバーと、毎朝出会える幸せを思う。

### 194 部屋割り 芳賀 慈 2007.07.06

フリースクールとしては3年ぶりの実施になる修学旅行。ルスツ、洞爺方面に2泊の計画が進行中だ。生徒たちは具体的なタイムテーブルやしおり準備に余念がない。

フリースクールでは「修学旅行」というものを年度当初には計画していない。生徒から提案がありみんなで行こうと話がまとまったときに実施されるので、在学中連続して経験する人もいれば、経験

せず卒業する人もいる。今年の生徒20人のうち、ここ1年以内の入学が14人、そのうち8人が4月以降の入学という新人揃いのフリースクール。前回の旅行を経験した生徒が皆無な割には話がまとまってきている。

注目は女子の部屋割り。いつの時代もモメにモメる。男子の場合は10分もあれば決まるし、それについて話題になることもないが、女子は決まるまで数日。決まった後は「やっぱり行かない」などという生徒も出てきたりする。不安はいろいろあるだろうけれど、今の出会いを大切に考えて、協力し合ってほしいと思う。

どうでもいい話で夜盛り上げられるような仲間は、いくつになってもつくれるわけではない。寝食をともにする中で、また少し互いの距離が近づくことを期待している。

### 195 33キロを歩く 亀貝一義 2007.07.09

学園の大きなイベントのひとつが「33キロ強歩遠足」である。毎年7月の第一土曜日に実施している。第1回目が99年。その後雨天などで行わない年もあったが、今年が第7回目である(7月7日)。

札幌市南区の真駒内から、支笏湖湖畔まで山道33キロを歩く。この行事についての昨年のエッセイがあるので参照いただきたい([NO106-120.pdf:NO8](#))。

(なお同じコースを「[北海道を歩こう](#)」行事として札幌市その他が毎年開催している。今年は第30回目で、9月2日に行われる(参加費2,200円)。

私もこれまでほとんど「歩く」グループの一人として参加してきた。途中リタイアした年もあったが、だいたいは完歩することができている。

同僚の先生方に「私はただ自分本位で歩くことに徹するので周りの生徒たちに何があっても構わないことにするのでよろしく...」という厚かましい確認を許されているから気が楽でもある。以前、殿(しんがり)をつとめたことがあったが、これは想像以上に大変であった。

この行事は、生徒たちの参加は9割近くなる。親たちも実にかくさんが参加・協力してくれる。どうしてこれほどの人気行事になっているのか、驚くほどだ。

一人ひとりの生徒にとって「今一步の挑戦」を体感する、そして父母自身も子どもといっしょに実施できるという感動の体験にもなるし、自然とのふれあいをもつ意味もあるだろう。

小学生が何人か完歩した。途中クルマを利用した生徒もいたが、「来年こそは」ということばが語られている。ゴールで親たちが涙をこめて「よくやったね」と我が子を讃える姿に私たちもまた感動する。この支笏路は、もちろん20キロまではほとんど登り勾配である。その後は下りの道が多くなるので多少は楽だが「応(こた)える」といっていいだろう。しかし私自身でいえば今回はこれまでになく早く到着することができた。4時40分だったから、出発からちょうど8時間であった。「自分新記録」だ。休憩地点以外には休むこともなかった。いろいろ好条件が重なったのだと思うが、まあ「我ながら満足」の心境であった。70歳を過ぎてヒマラヤ登頂をめざしたり世界ヨット一周を心がける人もいることを思えば、33キロなどで威張ることではないとは思っただが...